



【会社概要】

- ・商号 株式会社NICHIGO NICHIGO CORPORATION
- ・所在地 本社・曙工場: 札幌市手稲区曙5条5丁目1番10号
稲穂工場: 札幌市手稲区稲穂3条6丁目4番38号
総合技術研修センター/テストコース: 小樽市春香町44番地2号
- 支社: 東京・大阪、営業所: 東北・北陸
- ・設立 1962年4月24日
- ・資本金 1億2千万円
- ・従業員数 291名(2019年6月)
- ・株主 川崎重工業株式会社、いすゞ自動車株式会社、他
- ・取引銀行 一みずほ銀行札幌支店、北洋銀行新千歳支店、三菱UFJ銀行札幌支店

【主な製品】

- ・ロータリ除雪車およびロータリ除雪装置
- ・凍結防止剤撒布車
- ・軌道モーターカー
- ・輸送用機械、重量物運搬車
- ・ゲレンデ整備車
- ・その他

【主要取引先】

- ・国土交通省(各地方整備局、北海道開発局、航空局)・防衛省・北海道庁・各県庁・各市町村・各高速道路会社・北海道旅客鉄道(株)・東日本旅客鉄道(株)・東海旅客鉄道(株)・西日本旅客鉄道(株)・四国旅客鉄道(株)・川崎重工業(株)・(株)小松製作所・日本キャタピラー・日立建機(株)・日本車両製造(株)・仙建工業(株)・日本製鉄(株)・日鉄物流(株)・JFE スチール(株)・JFE 物流(株) 他

今回の会員企業トップインタビューは、株式会社NICHIGOの鈴木社長に伺いました。同社は北国の冬の生活で欠かすことの出来ない除雪機を始め、草刈・道路清掃・土木工事などにも活用できる汎用性の高い製品に加えて輸送用機械・重量物運搬車や軌道モーターカーなど新しい技術を駆使して、設計・製造しているメーカーとして、高い技術力により地域社会の生活環境の向上に貢献しています。

Q. 貴社の沿革をお聞かせください。

A. 昭和37年4月、鉄道除雪に画期的な成功を収めた留萌鉄道株式会社の除雪機関車の技術と多年の経験を活かして、北海道その他わが国降雪地帯における冬季陸上交通を確保することによる国民生活の文化向上を目的として除雪機械の製作会社を設立しました。その後、逐年除雪作業の多様化に即応して、除雪機械の研究と開発を進めた結果、現在は業界の主導的地盤を確保しています。そして、蓄積された技術に更なる磨きをかけ軌道用保守車両、重量物運搬車、産業用特殊車両等の開発・製造を行うとともに、時代の要請に応えるべく新技術の開発により総合特殊車両メーカーとして、全取扱製品への相乗効果を基に社会貢献を推し進めています。

Q. 経営理念・経営方針についてお聞かせください。

A. 高い技術水準に基づいた優れた製品を顧客に提供することを通じ、地域社会の生活環境の向上に貢献する。方針として、除雪車両と産業車両の二本柱で特殊車両メーカーとして、常に新しい技術に挑戦し、人々の快適な暮らしをサポートする使命を担ってまいります。

Q. 話は変わりますが、本社入口に設置されている「感謝と誓いの碑」は、どの様なことから建立されたのでしょうか。

A. 設立50年を経過し、先人の愛社精神と多大な貢献によって現在の当社があるので、創立以来の物故者の方々に対して感謝し、更なる発展を誓い建造したものです。

Q. 石碑に並んでロータリ車が展示されていますが。

A. 除雪機のトップメーカーとして、歴史的価値のある当社製造車両の動態保存をしています。各地で活躍した車両の

復元修理を行い展示しており、当社を訪れるお客様に公開しています。

Q. 大型で特殊な製品の製造開発でご苦労された点などをお聞かせください。

A. 一般の建設機械のように数を沢山作るわけではなく、ロータリ除雪車の年間生産台数が少ないので、そこに取り付けるトランスミッションだったり、エンジンやアクスルのような部品の資材調達に大変苦労しています。

Q. 貴社の社風、社員気質などお聞かせください。

A. 何でも挑戦してくれる気質ですね。新しく営業が受けてきた仕事で新しいものを作っていく時に、作ったことのない機械を作っていくのですが、設計・製造・営業も含めてチャレンジ精神が旺盛な社員が多いと感じています。

Q. 当本部の公開研修に多数派遣いただきありがとうございます。一方、社員の採用にもご苦労されているとの事ですが、採用予定数や人材育成方針をお聞かせください。

A. 今年は、工場も含め新卒者で14名採用しました。近年は平均10名強です。新しいものを開発していくには人手が必要ですので、設計や資材調達、製造・検査などのエンジニアを含め、現業部門が少ないため中途採用も3~4名採っています。社員は、300名弱ですが、派遣社員も40~50名いますので、意思疎通をしっかりと図る必要もあるため社員の割合を増



稚内で活躍したHTR700 (左) と
黒部峡谷鉄道で活躍したHTR170R (右) を動態保存

やしたいと考えており、離職率は高くはないが、少し多めに採用していますし、技術を持った派遣からの採用も行っていきます。

人材育成面は、貴本部の階層別教育の青年・中堅から管理職層までを中心に、ビジネススキルで補完して毎年20名程度派遣しています。

Q. 働き方改革が話題となっています。女性活躍など貴社の取り組みなどをお聞かせください。

A. 急に人員は増やせないなので、信頼できる工場での外注・加工を増やしていく考えであり、品質面も考慮しながらアウトソーシングを考えています。また、現業に限らず事務部門も含めて生産性を向上させるため、各種システムの見直しや更新を図るなど、環境や設備の見直しを合わせて実施しています。

4月から法制化になった残業時間の上限規制について、中小なので1年の猶予があるが、平均40時間を切るように取り組んでいく考えです。

一方、女性活躍の面では、以前は管理職にも数人いたのですが、今は係長やアシスタントリーダーなど数人在籍しています。結婚・出産されても復職していますし、働きやすさにも着目し育児休暇や短時間勤務(小学6年まで)などを導入して女性にも働き続けてもらえるようにしています。現業の塗装などの最終仕上げの部門においても女性の活躍が増えてきたと感じています。

Q. 技術研修センターではどのような教育を行っているのでしょうか。

A. 全国にサービス拠点があり、北海道では41カ所あるサービス工場・協力工場向けに、当社の製品の操作や技術指導などの講習会を行うために1981年にテストコースと研修センターが作られました。

Q. 鈴木社長のご就任(入社)の経緯をお聞かせください。

A. 私は、オホーツクの興部町の出身で、旭川高専を卒業し、同年入社しました。私の前任までが、株主から受け入れていましたが、プロパーでは初代の社長ということで昨年6月から就任しました。入社当時は社員数も少なかったため、毎年母校に出向き先生にお願いして、5~6年続けて採用してきました。入社以降、技術系で工場が長かったのですが、営業や資材調達もやってきました。

Q. 鈴木社長の特に印象に残る仕事をお聞かせください。

A. 技術部門にいた時の方が思い出は多いのですが、管理部門にきてからは、この新社屋の建設でしょうか。現在地は菓子メーカーの物流倉庫だったものを購入し改修後に移転してきました。稲穂工場も手狭になっているので、近隣に手ごろな土地があれば、集約化したいと考えています。

Q. 会社設立されて半世紀を超えました。今後の事業についてお考えをお聞かせください。

A. 事業主体の一つは、除雪関係の特殊車両ですが、降雪エリアが限られていることもあり、更新需要が中心なので新規の受注は少ないと思っていますから、二つ目の柱として、産業車両の製作に力点を置いて知名度を上げ、ユーザーから声がかかるようなメーカーにしていきたいと考えています。

その意味においては、未来を担う子供たち(小学生)を対象にした工場見学で開放していますし、中学生には、職場体験を通じてものづくりの楽しさ・達成感や社会における必要性を感じ取っていただけるようなプログラムを用意しています。

Q. 産業車両とは、どの様なものに活用されているのでしょうか。

A. 一例としては、四国の阿佐海岸鉄道様に専用線走行のDMVを納入しているのですが、今年度3台目を納入することになっています。JR北海道様とDMVの開発を進めてきましたが本線で使用するには、法改正などが複雑で走行には至っていません。それ以外では、自社開発の制御技術を活かした輸送用機器なども手掛けています。以前はゲレンデ整備車も製作していましたが、海外メーカーとの競合もあり厳しい状況です。

また、特殊車両では、国連の承認を受けた、川崎重工業製対地雷除去車のベース車の開発・製造もおこなっており、アフガニスタンにて、地雷原を無害化した実績を持っています。



阿佐海岸鉄道DMV (デュアル・モード・ビークル)

Q. ニッチな分野で業績がさらに上がるよう祈念しています。

A. 社名の知名度は低いのですが、一つのものを作り上げるというものづくりの達成感を味わっていただけるので、若い皆さんの入社をお待ちしております。